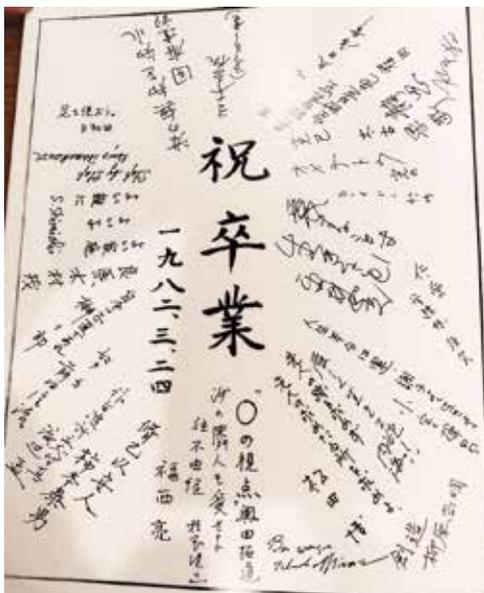


愛媛大学医学部 同窓会会報

2021 NOVEMBER No.37

発行日／令和3年11月1日
編集発行人／薬師神 芳洋
発行／愛媛大学医学部同窓会
〒791-0295
愛媛県東温市志津川
TEL(089)960-5989
印刷／太陽印刷株式会社
TEL(089)932-2881



表紙紹介
1982年3月「4期生謝恩会」

CONTENTS

副会長挨拶	2
卒業生からのメッセージ	3
新任教授からのメッセージ	5
役員一覧	5
退職教授からのメッセージ	6
愛媛大学医学部同窓会会則 細則 申し合わせ事項	7
医学部ならびに愛媛大学でご活躍の先生	9
50周年に向けて、4期生雄志座談会	10
活躍する卒業生	15
医学部医学科人事異動	15
恩師をおたずねします	16
決算・予算・第37回総会報告	18
支部紹介	20
医学部課外活動(運動部)紹介	20
愛媛ブランチナドクターバンク事業のご案内	22
あとがき	23
お知らせ	24

愛媛大学医学部同窓会副会長に就任して

武田 定典 (昭和58年卒、5期生)

武田脳神経外科 院長

東京2020 Olympicが終わりました。今回、日本は、日本のアスリートたちはよく頑張りました。たくさんのメダルを取りましたし、たくさんの興奮と感動をもらいました。

愛媛大学医学部も、2023年には、50周年を迎えます。卒業生も在校生も、皆で、祝いたいものです。

今回、前副会長の石田也寸志君の勇退に際し、同級生の彼から後任の同窓会副会長に推薦していただきました。私は、5期生です。昭和58年に卒業しています。入学したての新歓コンパは、4月の末連休前でした。みゆき会館であったと思います。その後2次会、3次会とあって、最後は、1期生の中条さんと、3期生の高田さんと一緒に、本学のグラウンドで、大声を上げていたのを覚えています。

部活は野球部でした。今は準硬式野球部のOB会長をさせてもらっています。顧問は、後輩の、現、薬師神芳洋会長です。彼が入部してきたのは、まだ小生も学生で、一緒に練習もしていました。おそらく彼が入学して最初の練習試合だったと思います。試合は負けてしまいましたが、それは我々にとっては、割といつものことで、皆でわいわい楽しそうに話しながら、帰ろうとしていた時に、「負けて、へらへら、笑ってるようなら、勝てません」と、真剣に怒っていたのを覚えています。

野球部は、1期生が、児玉俊夫さん、岩橋司さん、牛島聡さん、西谷晃二さん、浜田雄行さんと、野球部を作った人たちが卒業されて、当時2期生は、どなたもおられず、3期生は、太田博章さんと、上田久司さんでしたが、もう引退されていたと思います。4期生は、藤田学さんで、いろいろ忙しくされていました。当時のキャプテンは、同期の李俊尚君でした。彼に誘われて、入部しています。我々5期は、石田也寸志君、上田英二君、金川公夫君と個性的なメンバーがそろっていました。

それまで優勝したことのない野球部でしたが、高知県の春野球場で行われた、秋季四国準硬式野球大会で、わが愛媛大学が優勝したのです。小児科の試験を控えていた我々5期生は、監督として帯同してくれていた、1期生の浜田先生の指導の下、後輩たちも、われわれもよく頑張り、決勝戦を松山商科大学(当時)と戦い、延長12回で決着がつかず、オリンピックの野球と同じで、設定試合を行い、キャプテンの李君が、浜田監督のサインもまだ出ていないうちに、左中間を打ち抜いて、決勝のヒットを打ったのでした。初優勝でした。皆で万歳ですが、その日はおとなしく帰り、翌日、小児科の、松田教授(当時)のところへ、優勝旗をもって、5期生皆で(試験合格を)お願いに上がりました。見事野球部5名全員小児科試験に合格しました。その後、当時野球部顧問の小林讓(第一内科)教授が、「5名を宜しくお願ひします」松田教授にお電話されていたことをお聞きしました。古き良き時代です。

その野球部も、その後は、西医体で、2回も優勝することができて、OBとしては鼻高々です。去年今年とコロナでほとんど試合もないようですが、来年以降も、後輩諸君の活躍を大いに期待しています。西医体の優勝記念時には大祝勝会を行いました。普段見ない顔がたくさん集まって非常に楽しい祝勝会になりました。

済生会今治病院の脳神経外科で、18年頑張り、2009年1月に武田脳神経外科を開業しました。もう12年を超えました。割と早いものです。今治には野球部の先輩も後輩も活躍しています。県立今治病院の前院長、藤田学先生、現院長、川上秀生先生、済生会今治病院の、河合辰典先生、ほぼすべての脳神経外科手術を担ってくれています。今治第一病院の近藤元洋先生。皆で一堂に会ったことは今のところないですが、コロナの後は、また集まりたいものです。

中々皆が集まれる機会を作るのは難しいですが、コロナ禍の前まで野球部は、1月にはBBC(baseball classic)と銘打って、野球部による、野球部のための学術集会を開催しています。3月には学生の追い出しコンパの当日に、OB総会を行います。追い出しコンパの当日が、OB会の入会記念の会になります。8月には四国の4大学の医学部準硬式野球部OB野球大会を行っています。この四国四大学OB野球大会も第14回大会を一昨年徳島で行いました。さすがに去年今年と行っていません。毎年幹事の先生たちにはお世話になっています。今、幹事長は、門田脳神経外科の門田治先生です。

We will meet again!と、大きな声で叫びたい気持ちです。まずは、医療従事者として、同窓会は、すべての患者さんのために、とりわけ、このコロナ禍で、早く日常を取り戻すための、惜しみない努力と、協力と、献身をささげたいと思います。

愛媛大学医学部創立50周年が、みんなが笑顔で迎えられることを、これからしっかり準備していきたいと思います。皆さんと一緒に、皆様の大きな力を借りて、同窓会を盛り上げたいと思います。

よろしくお願ひします。



(前列中央が髭の筆者)



梶屋 正浩 (昭和61年卒・8期生)

(三重大学大学院医学系研究科 実践基礎看護学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、令和2年4月1日付けで三重大学大学院医学系研究科看護学専攻基盤看護学領域実践基礎看護学分野教授に就任しました梶屋正浩と申します。私は1986年(昭和61年)に愛媛大学医学部を卒業し、同年三重大学医学部附属病院第二内科(血液内科)に入局しました。三重県立志摩病院での研修の後、三重大学大学院にて骨髄異形成症候群から進展した急性骨髄性白血病の細胞学的特徴について研究を行い、大学院卒業後は天理よろづ相談所病院血液内科、三重大学医学部附属病院第二内科にて造血幹細胞移植に携わりました。その後、2001年(平成13年)4月から2年3ヶ月間米国サウスカロライナ医科大学実験血液学教室(小川眞紀雄教授主宰)でリサーチフェローとして“造血幹細胞の可塑性”に関する研究を行いました。マウスを用いた研究は初めてでしたので、試行錯誤の連続ではありましたが、血液細胞の一種の単球が腎臓の糸球体に存在するメサンギウム細胞に分化することを突き止めました。そして、2003年(平成15年)7月に帰国し、三重大学医学部附属病院輸血部副部長に就任いたしました。2007年(平成19年)10月から古巣の血液・腫瘍内科学講座(旧第二内科)の准教授に就任し、以来、大学院生とともに研究を続け、炎症下で傷害臓器に侵入した骨髄由来の単球がマクロファージや線維細胞に分化し、肝臓、脾臓、大腸の線維化のみならず腫瘍化に関与することを明らかにしてきました。

このような臨床・研究を継続する基盤は、愛媛大学入学以来6年間お世話になった保健医療研究会(保医研)での活動にあると考えています。現在も愛媛大学でご活躍の鳥居本美先生や坪井敬文先生が、入部間もない時期から私の下宿に足をお運びいただき、「ものの見方・考え方」などの書籍と一緒に読み、研究のイロハを教えていただきました。また、保医研では毎年、皿ヶ嶺の麓の上林地区でフィールドワークを行っていましたが、その年の活動テーマを決め、書籍や論文による事前学習を行い、疑問点を整理してアンケートを作成。それを持って夏休み期間中1軒1軒調査にまわり、結果を分析して地区で報告。同期の沖田俊司君(現済生会松山病院健診センター長)と渡辺修一郎君(現桜美林大学教授)が一緒だったおかげで、このような活動を6年間継続できました。また、保医研の先輩・後輩にも感謝感謝です。

現在は看護学科の学生・大学院生の教育に携わっていますが、彼らが、様々な課題をじっくりと考え、自ら対応を決めて行動できるよう支援していきたいと考えています。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



熊木 天児 (平成7年卒・17期生)

(愛媛大学医学部附属病院 総合臨床研修センター長・教授)

同窓会の皆様、2021年4月に総合臨床研修センター教授に就任しました「くまぎてる」と申します。後輩の皆様には「熊木ノート」でお馴染みかもしれません。私は香川県善通寺市で生まれ、愛知県犬山市で育ち、愛知県立旭丘高校卒業後、愛媛大学に入学しました。学生時代は旗振り役が多く、医学祭実行委員長を務め、歴代最多の80%が母校に残った第17期として卒業しました。

1995年に第3内科(恩地森一教授)に入局、半年後に赴任した済生会今治病院と町立津島病院では「ゼッケン医師」を目標に研鑽を積み、1999年に第3内科肝臓グループに所属しました。激務の中、一人の医師として行う社会貢献は診療のみでは限界があることに気付き、基礎実験の傍ら診断基準やガイドラインに関わる臨床研究を遂行できた事は貴重な経験となりました。学位取得後はカナダに渡り、トロント大学肝臓病センター(Jenny Heathcote教授)での診療従事に加え、臨床研究の醍醐味に魅せられ、医学教育の違いも目の当たりにした4年間を過ごしました。帰国後は第3内科胆膵グループを、翌年にはEPOCH(Ehime Pancreato-cholangiology) Study Groupを結成し、主に膵癌の臨床研究に着手しました。結成10周年目に成果が挙がり、奇しくもIF 500到達論文として医学科最優秀論文賞(2020年)と愛媛医学会賞(2021年)を頂けました。

2013年に日浅陽一教授にご推挙頂き地域医療学(川本龍一教授)へ異動し、教育に関わる機会が増えました。卒後7年目にして「教育こそ会おう事のない人々に役立てる潜在能力を持つ」事に気付き、愛大一筋では初となる海外医師免許取得の経験を母校にフィードバックする決意のもと出国しました。振り返ると既にこの時点で将来のレールは敷かれていたのかもしれませんが、学生時代は現在の働く姿など想像できませんでした。数年毎の新たな挑戦でしたが、「知るは楽しみなり、知るは喜びなり」の気持ちで楽しみ、8年連続Best Teacher賞も頂けました。

2020年4月にはセンター長を拝命しました。医学生との時間は減りましたが、肝胆膵診療、海外診療・医学英語、地域医療、総合診療、医学教育と多岐にわたる分野での経験を医学生・研修医・若手医師に熱く伝えて参ります。そして、歴代センター長(恩地森一教授、高田清式教授)の築き上げられた伝統を守り、研修医のBest Teacherでいられる様、メンタルヘルスケアとアカデミアにも注視して育成する所存です。つきましては、医学教育に対してご理解を頂き、ご支援の程よろしくお願い申し上げます。



竹内 一人 (平成8年卒・18期生)
(愛媛県立医療技術大学 保健科学部臨床検査学科 教授)

愛媛大学医学部同窓会の皆様、令和3年4月1日付けで愛媛県立医療技術大学保健科学部臨床検査学科生体情報学講座教授を拝命致しました、竹内一人と申します。まず、昨今の新型コロナウイルス感染症関連のご対応に対し多大なご尽力・ご貢献をなされている同窓会の皆様に深い感謝と敬意の意をお伝え申し上げます。コロナ禍の為、皆様大変ご無沙汰しております。

この度同窓会より寄稿のご指示を賜りましたので、ご挨拶させていただきます。

私は地元出身で平成8年に卒業した18期生です。卒業後、血液内科・総合内科を志し愛媛大学医学部第一内科（現血液・免疫・感染症内科学）に入局致しました。当時の藤田繁教授にご指導を賜り、同附属病院と宮崎県立宮崎病院で初期研修を致しました。その後愛媛大学大学院医学系研究科に進学し、酒井郁也先生のご指導のもと慢性骨髄性白血病に関する研究を行い、大学院卒業後は愛媛大学医学部附属病院第一内科、宇和島社会保険病院（現JCHO宇和島病院）内科、愛媛県立中央病院血液腫瘍内科などで診療に従事して参りました。

平成26年に愛媛大学医学部附属病院腫瘍センターに戻り、血液・免疫・感染症内科学前教授の安川正貴先生、現教授の竹中克斗先生、臨床腫瘍学教授の薬師神芳洋先生のもと、血液内科・腫瘍内科の診療・教育・研究に励んで参りました。充実した日々を過ごさせて頂いておりましたが、ご縁があってこの度現職を拝命するに至りました。これまで多くの先生方、同窓会の皆様に多大な御指導、御支援を賜り心より御礼申し上げます。

砥部町にある愛媛県立医療技術大学は、愛媛大学医学部からほど近く、緑も多く素晴らしい環境にあります。昭和63年に短期大学として設立、のち4年制大学となり、現在看護学科、臨床検査学科、助産学専攻科、大学院からなる充実した医療系大学として発展しております。私の講座では血液学、臨床病態学、検査診断学、画像診断学など多くの講義・実習を担当し、学生の教育・研究に尽力しております。安川正貴理事長・学長のもと、愛媛に根差して世界に発信できる医療人を育成し、愛媛の医療に貢献すべく精進していく所存です。今後さらに愛媛大学との連携を深めて参りたいと考えております。同窓会の諸先生方には、ますますの御指導御鞭撻を賜りますよう、今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。コロナが落ち着き、皆様にお会いできる日を楽しみにしております。



古川 慎哉 (平成9年卒・19期生)
(愛媛大学 総合健康センター 教授)

愛媛大学医学部同窓会の皆様、この度昨年の令和2年4月1日より愛媛大学総合健康センター教授を拝命いたしました。私自身は広島出身ですが、平成3年に愛媛大学医学部に入学後、大学入学後は一貫して愛媛でお世話になっております。無事平成9年に愛媛大学を卒業し、縁があって第3内科の恩地森一先生の元で内科医として研修及び研究を開始いたしました。

入局後も恩地先生には大変わがままを聞いて頂き、肝炎の樹状細胞の研究、肝臓グループから糖尿病内分泌グループへの異動、さらには公衆衛生学への異動についてもご支援をして頂きました。なにぶん飽きやすい性分であることから、手を焼かれていたのではないかと思います。

公衆衛生学異動後、さらに地域医療学講座でお世話になり、ご縁がありましてこの度総合健康センター（平成18年から保健管理センターから名称変更）へ異動させていただきました。

従来の学生健康診断に加え、職員の健康管理もその使命とされております。学生の健康管理についても、新型コロナウイルスで十分な学生健康診断実施が危ぶまれていましたが、医学部の先生方にも大変助けていただきました。

また、大学においても産業衛生の重要性が高まっています。大学外においてもワークライフバランス、働き方改革、健康経営など構成員の健康維持することが会社の効率性につながると考えられています。医療職はかつて聖域とされておりましたが、皆様もご存知の通り医師の働き方も見直されてくると思います。

浅学非才の身ではありますが、本学の発展のために尽力をする所存ですので、愛媛大学医学部同窓会の皆様には今後ともご支援ご指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



武内 章英

(愛媛大学大学院医学系研究科 生体構造医学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、2021年6月1日より、新しく統合講座となりました生体構造医学講座（旧解剖学・発生学+機能組織学）の教授を拝命いたしました武内章英と申します。私は岐阜県の出身で、平成5年に名古屋大学医学部を卒業、平成11年に同大学院医学研究科を修了と、長く地元の中部地方・東海地方で過ごしました。留学を機に米国カリフォルニアのベイエリア、ラ・ホヤ、東京、京都と、世界的にも有名な都市で研究生活をする機会に恵まれ、この度ご縁を賜り愛媛に来ることになったのはその延長なのかと思っています。

脳科学に興味があったことから卒業後は脳神経外科のレジデントになりました。そこで、高度な機能を持つヒトの脳の脆弱性、脳腫瘍の治療の難しさ、治療法なく進行していつてしまう多くの神経変性疾患・精神疾患・痴呆症がどのようなものかを知りました。複雑な脳の形成機構を理解しさらに神経疾患の解明や治療に役立つ研究をしたいと思い母校の大学院に入り、さらに卒業後にはSalk InstituteのDennis O'Leary教授の元に留学し、神経発生研究に携わってきました。その後東京医科歯科大学および京都大学で、遺伝暗号物質であるRNAの制御から神経発生機構を解明するRNA Neurobiologyという新しい研究を始めました。これまでの研究で未解明であった神経発生の謎の解明に成功し、今後さらに研究を大きく進展させながら神経変性疾患や精神疾患との関わりを明らかにしつつ病態解明や治療法の開発につながることを目指しています。

教育では解剖学教育に携わってきました。生命科学が大きく進歩するにつれ、医学部の教育は分子～細胞～個体、さらに疾患を含めて医学・生物学を横断的・統合的に理解し、そこに最先端の研究の知見をフィードバックして行くことがますます求められていると感じています。また学部教育がメインであった解剖教育は、サージカルトレーニングを含めた卒後教育にもそのニーズが大きく広がりつつあり、解剖や組織の基礎講座は大きな変革を求められていることを強く感じております。これまでの関連分野の先生方と連携しつつ、デジタルデバイス等を積極的に利用してきた教育や基礎医学研究の経験を活かし、研究、教育の新しいスタイルを模索しながら愛媛大学医学部・医学系研究科のさらなる発展のために貢献していく所存ですので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



重松 裕二 (昭和56年卒・3期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 基盤・実践看護学 教授)

愛媛大学医学部を去るにあたって

昭和50年(1975年)に三期生として愛媛大学医学部に入学し、すでに46年の歳月が流れました。今年度で教授を退職することになりましたので、これまでの私の足跡を同窓会のみなさまにご披露し、ご挨拶に変えたいと思います。

私が入学した昭和50年当時、まだ医学部施設は建設中のものも多く、広い敷地が殺風景に感じられました。特に今と大きく異なるのは、周りの風景です。伊予鉄道医学部南口駅は当然、存在せず、東通用門を出ると一面に田園風景が広がり、横河原駅までは狭いあぜ道を使って通いました。

卒業後、私は第二内科(現在の循環器、呼吸器、腎高血圧内科)の門を叩きました。当時の第二内科は、日本における高血圧領域の権威者であった國府教授(初代教授)が主宰しており、高血圧の発症因子に関する実験的研究に精力を傾けていました。また、当時は医局制度が厳しく守られている時代であり、大学附属病院における1年間の研修が終わると、すべての同期入局者は愛媛県下の臨床病院に派遣されました。私もどこの病院に派遣されるのだろうかと不安を募らせていた時、國府教授に呼び出され、「レニンの研究をしてもらうので、大学院に行きなさい。」と命じられました。臨床、特に循環器内科を漠然と考えていた私にとっては突然のことで、不安に駆られたことを今も鮮明に覚えています。その後、心臓グループの先生方から教授に私の真意を話して頂き、やっとの思いで心臓グループの大学院生として大学に残ることになりました。それから、40年間、循環器内科医を続けており、もうしばらくは診療に携わっていきたいと思っています。

平成17年(2005年)からは、四半世紀お世話になった第二内科を出て、看護学科に異動しました。赴任の挨拶のため、看護師出身の古参教授のところを訪問すると、「看護教育はミニドクターの養成ではありません。医学と看護学の違いをよく理解して、看護教育を行ってください。」と訓示されました。常に医学と看護学の違いとは何かという命題を胸に看護教育を行ってきましたが、15年が経った今も答えは見つかっていません。

さまざまな出会いを繰り返して、医師として、教育者として成長させて頂いた愛媛大学とも別れの時が近づいてきました。診療、教育、研究のバトン次世代の先生方に受け渡したいと思います。今まで、同窓会員の皆様、お世話になりました。



佐山 浩二 (昭和57年卒・4期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 皮膚科学 教授)

同 窓 会

愛媛大学を定年退職するにあたり、私のキャリアを振り返って何を考えてこの道を歩んできたのか書いてみたいと思います。

愛媛大学には3期生として入学しましたが、途中1年間留年し4期生として卒業しました。現在では留年=国試不合格のリスクファクターとなっていますが、当時はそのような解析すらしていなかったもので、のんびりしたものです。今でいうバックパッカーとなってインド、中近東、アフリカを半年間旅行しました。今では訪れることが困難なアフガニスタンや南スーダンも当時はのんびりした雰囲気、盗難以外はそれほど身の危険を感じることもありませんでした。この話をすると、あるDr.が「それは自己のIdentityを求める旅ですね」とおっしゃられて、なんとカッコいい表現なんだと思自分の中ではそういう位置づけになっています。教官になってからは職務上、留年したらダメだよ、出席はきちんとしなさいと指導しなくてはなりませんでした。留年しても大したことはないし、試験さえ合格したら授業には出席しなくてもいいんじゃない?といつもモヤモヤしたものを持っていました。

40才を過ぎた頃に結婚式でスピーチをする機会があり、はたと自分の人生を考えると、何と半分以上使ってしまったのに気付きました。当時は臨床、研究が面白く脂がのりきった時期だったので、自分の人生を仕事中心に使うことに抵抗感はなくむしろ喜びでした。そのうち教授職を狙えるような業績がたまり、他大学に応募したこともありますが、ここで考えたのは子供のことです。大体において教授になるような年代の人は家族の制限から、単身赴任だったりします。当時はまだ小学生の子供がいたので、この時期は一緒に過ごしたいと考えて、他大学に応募するのはやめました。ただ、教授選は椅子とりゲームのようなものなので、タイミングを逃すと椅子は埋まってしまう。たまたま選任されましたが、選任されなかった場合後悔しなかったかと言われると、多分したと思います。

医師の働き方改革が2024年に始まり、さらに2030年を過ぎたあたりから少なくとも頭数だけは医師の需要と供給の関係は逆転するので、これから医師の働き方は大きく変わると思います。医師の仕事が人生の全てではありません。それぞれの年代でその時にしかできないことがいっぱいあります。年相応に教訓みたいなものを書いてしまいましたが、皆さんには充実した人生を歩んで頂きたいと思っています。



三浦 裕正

(愛媛大学大学院医学系研究科 整形外科学 教授)

私の座右の銘 — 怠惰を克服するために —

2010年4月1日付けで愛媛大学医学部整形外科教授として赴任して以来、2022年度末をもって12年間の任期を終えようとしている。退任にあたりこれまでの私の基本的な生き方、信条を披露することで、同門会の皆様へのメッセージとしたい。

私はどちらかと言えば怠惰で易きに流れやすい傾向があり、常に自己を鼓舞していく必要があることを自覚している。その方策として、「現状維持は後退である」と「今、ここを生きる」を座右の銘としてきた。

世の中のスピードに適応するためには、常に加速度感を持ちながら、事に当たるべきだと考えている。これまでの蓄えだけで乗り切れるほど世の中は甘くなく、向上心を忘れた途端、あっという間に医学の進歩からは取り残されてしまうことになる。

「今、ここ」については、古今東西の賢人達が繰り返し述べている。たとえば、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドという哲学者は全宇宙の森羅万象は不連続な出来事の連なりであり、その不連続な一瞬、一瞬、かけがえのない一瞬、この時空で唯一無二の出来事の重要性を述べている。また、心理学者のアドラーも「今、ここを真剣に生きる」ことの重要性を強調している。臨済宗中興の祖である白隠慧鶴が師事した正受老人は「一日暮らし」を提唱している。

「人生の中で一番大切なことは、今日ただいまの自分の心なのだ。それをおろそかにしては、翌日などというものはない。今日をきちっと一生懸命に務めるように心がけなければ、明日という日も墮落した日になってしまう。」さらに松下幸之助は、どんなに悔いても過去は変わらない。どれほど心配したところで未来もどうなるものでもない。いま、現在に最善を尽くすことだと主張している。これらは決して無計画に刹那的な生き方をせよということではなく、未来のビジョンの中にたたみ込まれた日々の計画を確実に実行していくことに他ならない。毎日を無為に過ごすことなく、高い志のもとに二度と訪れない機会を全力で生きること、一瞬一瞬にきらめくことだと考えている。

人の価値観は様々であり、その多様性が尊重されるべきであると考えてるので、決して私の生き方を推奨するものでも、押しつけるものでもない。何らかの参考になればというぐらいの気持ちで読んでいただければ幸甚である。

以上、愛大医学部、附属病院の全スタッフおよび愛大同門会の皆様これまでのご厚情に対し心からの感謝を捧げつつ、稿を閉じたい。

医学部ならびに愛媛大学でご活躍の先生



医学部後援会会長就任のご挨拶

宇野 英満

(愛媛大学 理事・副学長 医学部後援会会長)

愛媛大学医学部同窓会の皆様、三男が平成31年4月より2度目の大学生活で愛媛大学医学部にお世話になり始めたことから、令和2年より後援会長をお引き受けした宇野英満です。折しも新型コロナウイルス感染症が全世界へと広がり、日本にも甚大な影響が出始め、緊急事態宣言も発令される事態となっていました。この影響で2年間後援会役員会及び総会是对面で開くことができませんでした。医学部における授業においても遠隔授業が中心で、息子も家で授業を受けることが多い日々を送っています。医学部では遠隔授業による教育や評価については、4年次修了時のCBTが義務化されていることから、他の学部よりも進んでいると推察いたしますが、解剖実習等のように対面で行うからこそその効果のあるものもあります。多くの制約がある中でも学生に対する医学教育がしっかりと行われてきており、このことはひとえに先生方のご努力の賜物であると後援会員一同感謝に堪えません。

一方で、学生にとって大学生活での掛け替えのない経験は、授業や部活、サークル活動等を通じて仲間を作り、ともに競い、ともに協力して楽しみ、あるいは苦しんで様々なことに取り組んでいくことで得る成果であろうと思います。これらの経験の多くが今現在奪われてしまっている学生たちは大変可哀そうに思います。体育系の部活やサークルにおいても、遠隔ミーティングやビデオ視聴によるイメージトレーニングしかできないような状態です。高校までにすでに経験してきているような競技ならそれでも何とかなるかもしれませんが、全く新しい競技に挑戦しようと思っていた学生も多いと思います。新しいことに挑戦しようと思っていた学生には大変大きな障害となり、あきらめてしまった学生も多いと思います。私自身の大学入学の時を思い出してみると、高校までにしたことのない運動クラブに属してみようと思い、一度もしたことのないスキー部に入部しました。人工芝スキーもないころでしたので、3か月陸上の練習とイメージトレーニングをした後、奥穂高の涸沢雪渓まで夏山登山の装備をしたうえで重いスキー靴と板を担いで上って初めてスキー板をはいて滑りました。当然うまく滑れませんでした。このときの思い出は今でも鮮烈に心に残っています。

今の大学生は我々が経験したことのない困難に直面しています。少しでも学生達が充実した大学生活を送れるように、教職員の皆様に学生へのご支援をお願いするとともに、後援会としても最大限の支援をしてみたいと思います。



ご挨拶：愛大病院長に就任して

杉山 隆 (特別会員)

(愛媛大学医学部附属病院長)

2021年4月より医学部附属病院長を拝命いたしました。

本院は、1973年の医学部設置後、1976年10月に開院し、約45年が経ちました。すでに50周年記念事業に向け羽藤直人教授を中心に準備を進めていただいているところです。本院は、「患者から学び、患者に還元する病院」を基本理念に地域に根ざした医療を実践し、現在では、24診療科、47の中央診療施設、病床数644と大きく発展し、約450名の医師、約650名の看護師、薬剤師・放射線技師等の医療従事者および事務職員の340名を合わせ、総勢約2,000名の病院スタッフにより万全の態勢で医療を行っています。

私は、三重で出生し京都で育ち、その後、三重→大阪→三重→宮城といった府県を經由し、愛媛の地に参り6年が経過いたしました。これまでいろいろな地域の産婦人科医療に携わってきました。地域産婦人科医療では特にマンパワーの視点より重要な課題であることはよく知られていますが、より効率的な地域周産期医療の維持・発展のためには、行政や関連病院との連携が極めて重要となります。病院長としての経験はもちろん初めてではありますが、病院の運営においても、院内のみならず地域医療や医師会や行政との病院内外の連携が重要であることに変わりないと考えています。

就任後、いきなり新型コロナウイルス感染症拡大による第4波が当県も襲い、重症患者の管理という役割を担っている本院は、あっという間に医療ひっ迫に追い込まれました。コロナ病棟の運営に関しては、救急科や麻酔科を中心に看護部の強力な支援に加え、各診療科の手術数制限、感染制御部・検査部・事務部の協力で病院全体で必死に対応いたしました。病院内だけで解決できる問題ではなく、県や医師会、関連病院との連携により、対応強化策を考えていただきましたし、マスコミの協力もいただきながら県民へのアピール強化も図りました。ワクチン接種に関しては、病院の多職種が応援するとともに本学として大学を中心に職域接種を行い、各部署の協力下、行政のワクチン接種の負担軽減に努めました。

この未曾有の感染症は、病院として長期間の災害モードの運用となり、特定機能病院としての役割も維持しながら院内のみならず院外の関連病院との連携強化がいかに重要であるかを改めて知ることとなりました。本院が県下のマザーホスピタルとして、各部署が関連病院に若手医師のみならず医師交換を行いながら連携し、今後のさらなる少子高齢化を見据えた地域医療構想に基づく関連病院全体の対応を図り、さらに地域医療を守るための働き方改革を達成すべく、愛大病院長として県全体と連携の上、全力を尽くす所存です。

同窓会の皆様には、今後とも引き続きご指導・ご支援いただきますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

50周年に向けて、4期生雄志座談会

(1) 自己紹介

薬師神)2021年8月7日、4期生雄志の座談会を始めます。順番に自己紹介をお願いします。



八杉)八杉 巧(やすぎたくみ)です。神戸の下町出身です。愛媛大学卒業後、愛媛大学の第一外科に入局しました。2008年外科学講座の再編で第一、第二などのナンバー外科がなくなり、3講座に分かれてからは心臓血管呼吸器外科で仕事をしています。2014年からは併設の看護学科でも教鞭をとっています。

村上)村上一雄(むらかみかずお)といいます。私は兵庫県出身で、卒業後は愛媛大学の第二内科に入局し、研修を終えてからは県内外の関連病院をまわりました。2003年から松山赤十字病院で勤務し、内科で診療をしていましたが、2008年からは人間ドックや健診の仕事を中心にしています。

三木)三木優子(みきゆうこ/旧姓・水沼)です。私は第一内科に入局して3年間の臨床を経て、保健所に転向しました。以降、保健所で長く勤めています。保健所の大きな役割の一つである健康危機管理が、ここ数年は頻繁に起きるようになってきました。災害発生後の健康管理に、昨年からは新型コロナウイルス感染症対策。本当に厳しい状況の中、仕事をしております。よろしくをお願いします。



愛媛大学大学院医学系研究科
基盤・実践看護学教授
八杉 巧

石丸)石丸眞由美(いしまるまゆみ/旧姓・永井)です。卒業してから、一雄先生と同じ第二内科に入り、2年間研修させていただきました。結婚を機に、国府教授が「女性は定時に帰れた方がいいよね」とおっしゃってくださり、愛媛県健康増進センターで2年間勤めました。それからは育児を優先させたかったので、週に何回という形で仕事をさせていただきました。現在は、愛媛県厚生連健診センターで健診と人間ドックの仕事をしています。

土居)土居興(どいこう)です。松山生まれの松山育ちで、卒業後はすぐに愛媛県立中央病院で2年間研修しました。愛媛大学の第一外科に戻って病棟で2年間を過ごした後、大学院に進学しました。終了後は大洲の加戸病院に赴任し、7年ほど勤めた後、開業しました。今、開業して25年目になります。

(2) コロナ対応

薬師神)今日は内科が3名、外科が2名というバランスですね。内科の先生方は保健や健診業務が主体で、三木先生は県の職員ですが、今のコロナ問題についていかがでしょう。

三木)毎日、患者さんや濃厚接触者の調査をしています。検体採取もしています。マスクをしているかどうかは大きなポイントなので、本日の座談会もマスクのまままでとご協力をお願いしました。今一番大変なことは、毎日多くの患者さんが出ているので、病床を確保することです。空いているからと患者さんをどんどん入れていくと、重症患者さんが出たときに対応できなくなるので、宿泊療養や在宅療養を併用する形になっています。



愛媛県中予保健所
所長 三木 優子

薬師神)三木先生の助言に従い、マスク着用で座談会を進めていきます。健診業務には変化がありますか。

石丸)飛沫感染を避けるため、呼吸機能検査は止めています。

村上)胃カメラの検査なども、施行可能かどうかの判断を、状況を見ながら行っています。健診を受けに来た方へ症状や移動状況をお聞きして、受診可能か判断をしています。県外から来た受診者に健診を受けられるのか判断に迷うこともあります。県外からの受診者をすべて断れば感染のリスクは減らせませんが、実際には状況との関連もあり判断が難しい場合があります。

薬師神) 開業医の土居先生はいかがでしょう。

土居) 最低限、検温とマスク着用で診療をしています。発熱外来も設けていて、フェイスガードとガウンを着用して診療にあたります。まだ、コロナで陽性になった方と接触したことはありません。



土居外科胃腸科医院
院長 土居 興

薬師神) オリンピックが終わってどこまで感染者数が増えるのかという不安が非常に強いですが、それでもこうして同窓会総会や座談会もさせていただきました。

(3) 当時のふりかえり

薬師神) さて、昨年まで1期生から3期生までの座談会を開催しました。それぞれのカラーは、1期生は初代ということもありお兄さん、2期生はちょっと変わった次男坊、3期生は座談会では「チャランポラン」を地で行く雰囲気がありました。4期生のカラーはどういう感じだと思われますか。

八杉) 入学当初の授業は、約50名ずつ「アイウエオ順」前半・後半の2クラス編成で、どことなく片方はおとなしいけど、もう片方は…という感じでした。1～3期生と先輩方がそろってきて、多くのクラブ活動が発足したり、授業面でも過去問をいただけたり、何をしたらいいかわからないという状況はなくなりました。みんなでご飯を食べに行ったり、ほとんどの学生が何かのクラブに入ったりと、今の学生と変わらない感じでした。



愛媛県厚生連健診センター
石丸 真由美

薬師神) 学生時代に印象的なイベントや思い出深い出来事がありますか。

村上) 私は入学直後から卓球部に入りました。医学部の学生より、他学部の学生とインカレに行ったり、学祭に出たり、中島の駅伝に出場したり、全学部のイベントによく出ていました。4期生全体としてのカラーはどちらかというと地味な感じで、私のように自分のペースで好きなことをしているイメージでした。

薬師神) 当時、附属病院は完成していましたか。

村上) 外観は完成していました。私が入学して、初めて病院に来たときにはまだあちこち工事中という表記があったことを覚えています。ほとんど何も無い状況の中でも楽しく過ごしていました。

薬師神) 授業は医学部でも受けることができたのでしょうか。

村上) 私たちの頃は基礎教養を城北キャンパスで行い、五十音順の前半・後半に分かれて授業がありました。そのため、前半・後半それぞれで仲のいいグループができていく感じがありました。今日もたまたまですが当時の後半にいたメンバーばかりですね。

薬師神) 前半の方にも招待をしたのですが、偶然にも出席ができないということだそうです。

村上) 最初に前半・後半のメンバーで行動することが多かったからか、その後の関係性もそのグループで固定される感じになりました。実習でも、後半の人と話してばかりで、前半の人と話す機会は少なかったです。

薬師神) 最初の授業で決まってしまった感じですね。この頃基礎の教室に行くことはありましたか。

土居) 私たちの頃にはありませんでした。最初の2年間は、ほとんど城北キャンパスで過ごしていましたね。

薬師神) 1～3期生と同じですね。その後先輩方は、基礎の教室で先生とお酒を飲んだり、医学祭を創設されたりということがあったと聞いています。4期生の方は、基礎時代の思い出がありますか。

石丸) 生理学の授業で、ウサギを使った実験中、麻酔が切れてしまいウサギが騒ぎ出しました。驚きやかわいそう、という気持ちでショックを受け、実験を続けることができませんでした。先生からは「そんなに動物をかわいそうに思うのなら、動物慰霊祭に来なさい」と言われて、慰霊祭に出席し、レポートを書いた思い出があります。

薬師神) もっと前に解剖実習もあったと思うのですが、それは大丈夫でしたか。

石丸) 解剖実習は、土居先生はじめ同じ班の人に助けてもらいながら取り組むことができました。

三木) 石丸先生は特別、動物愛護の精神が強い方でしたね。

薬師神) 私も詳しくは覚えていませんが、特に第二解剖の先生方はユニークな方が多かったですね。



松山赤十字病院 健診部
部長 村上 一雄

八杉)今では考えられないことですが、昼間からお酒を飲んで、大学の研究室で一眠りして、夜の間に実験をするという夜型の先生がいらっしゃいました。解剖教室で実験があってもなくても、お酒を飲みに来るだけの学生もいました。

村上)3～4回生のときは、いろんなところに行ってフィールドワークをするというサークルにいたので、寄生虫の研究室や「門田荘」で夜遅くまで議論していました。

薬師神)畠山先生は1期生の座談会にいらしてましたが、とてもまじめな印象を受けました。

八杉)1期生は確かにまじめで、堅物というイメージの先輩が多かったですね。

薬師神)2期生以降、少しカラーが変わっていきますね。

(4) 卒業後の進路

薬師神)さて、みなさんは卒業後の入局先をどのように決められたのでしょうか。石丸先生、第一から第三まで内科はそれぞれ特徴的な先生がいらっしゃいましたが、決め手は？

石丸)私はどちらかという、仕事一筋というタイプではありませんでした。当時の第二内科の先生から「本当にやりたいことをやって、辞めるときはスパッと辞めてもいいんじゃないか?」と言ってもらい、松山東高校時代の先輩に誘ってもらったこともあり、第二内科へ入りました。周りからは国府先生は厳しい方だと思われていましたが、すごく優しくしていただきました。もちろん仕事に対しては厳しく、回診のときはピリピリ。オーベンの先生方も必死でした。女子が本当に少ない時代だったので、仕事だけでなく人生のことまで教えていただきました。



国府 達郎 先生

薬師神)国府先生は、授業がとても理路整然としていましたね。外科はいかがでしょうか、八杉先生。

八杉)外科の講義も良かったですよ。今と違ってほとんどの講義を教授がされていたのが印象的でした。当時の第一外科の恒川教授が優しくて憧れ、第一外科に入局しました。

土居)私は、当時研修で行っていた県立中央病院の先生から紹介していただくという形で第一外科に進みました。

薬師神)第一内科はいかがでしょうか。

三木)第一内科もすごくよかったです。今でもよかったと思っています。特に私は保健所に入ったので、感染症の仕事も多く、エイズや他の感染症対応に第一内科の同門の先生方に相談ができ、それぞれ、基幹の病院で感染症の医師として勤めていらっしゃるの、いざというときにとっても頼りになりました。

薬師神)当時は、学年の100人で、何人が大学に残ったのでしょうか。愛媛出身者は多かったのでしょうか。

八杉)大学に残ったのは4割ですね。入学時点での出身が愛媛県3割、関西圏3割、それ以外3割で、大学に残った愛媛出身者がどれくらいかは覚えていません。

薬師神)当時、県外から来られたという村上先生は、地元に戻る気持ちはなかったのでしょうか。

村上)私の父は「卒業したらさっさと帰って、地元の大学病院に戻ってこい」と言っていましたね。母も、「早く帰ってきて開業して一緒に暮らしたい」と言っていたのですが、今に至っています。

薬師神)八杉先生も県外出身ですよ。

八杉)僕も、神戸大学を見に行ったこともありましたが、しばらくは愛媛でやってみようと思いました。それで、40歳頃に神戸に帰ろうかという気持ちを持っていました。40歳になる前に阪神淡路大震災があり、実家も被災してそれどころではなくなって、今に至っていますね。

薬師神)そうだったんですね。県内出身の先生方は、選択肢もなく残ったのでしょうか。

土居)愛媛が好き、という感じです。

石丸)私も愛媛が好きなので。

薬師神)うれしいですね。



(5) 研修制度の現状

薬師神)今は3割残ればいいという状況です。研修で都会に行きたいと考える学生がいます。石丸先生はこの現状をどう考えておられますか。

石丸)研修制度が変わり様々な場所で研修を受けられますよね。それによって都会に行きやすくなったと思いますし、都会を見るといいところが目に入って都会に行きたい、居続けたいと思ってしまう人も多い。だから、また現在の研修制度を見直してほしいです。

薬師神)研修制度によって医局の体制がかなり変わりました。最初の2年間は入ってくれる人がゼロという事態にもなりました。県の職員としてはいかがでしょうか。

三木)愛媛に一人でも学生や医師が残ってほしいと強く思っています。臨床医としてたくさんの先生にとどまっていたきたいのはもちろん、保健行政にも関心を持って下さる方が少しでもいたら嬉しいです。

薬師神)一方、学生の立場としては多様な症例を経験したいという気持ちから、多くの患者さんを経験できる都会の病院がいいという結論になると思うんですが、土居先生はどう思われますか。

土居)私は、基礎研修に関しては愛媛県で十分だと思います。都会でも愛媛県でも基礎的な症例の経験を積むのは同じで、県立中央病院・赤十字病院・市民病院などで十分だと思っています。2年間の研修のときに、専門分野に興味を持ったので詳しい専門医について学びたいということ考えたのなら都会に出ることも選択肢の一つとしてあると思います。ただ、シニア研修であっても、愛媛には立派な専門家の先生も十分いらっしゃるの、あえて県外に行く必要があるのかな、という気持ちもあります。

薬師神)学生の若いうちには、いろんな刺激があるところに行きたいという気持ちは、自分にもあったことなので理解できるのですが、母親の立場ではどう感じますか。

石丸)私には息子と娘がいます。二人とも都会には行きたがらなかったです。息子は鳥取大学に、娘は山口大学に進みました。子どもの同級生には、都会に行きたいという子たちがいたのも事実です。

薬師神)学生に対して、愛媛大学や愛媛の医療の良さについてアピールできることはありますか。

八杉)さきほど土居先生も言われましたが、研修もその次のステップも愛媛県の中でちゃんと完結できるようになっています。さらに同門の医師たちが近くにいるという心強さや安心感もあります。都会に行ったけれど、少し水が合わなかったという方もいます。愛媛の方が知っている人や慣れた環境で研修に取り組めるメリットもあります。また、5年目などに都会に行きたいと思ったら行けるようにもなりました。「最初のステップこそ、住み慣れていて仲間が多い愛媛ですべき」と学生に伝え、お勧めします。

薬師神)八杉先生のおっしゃることも最もですが、今は最初の研修が5年間で、ジェネラリストのような経験を積みます。さらに専門研修が3~4年続くので、一人前になるまでに7~8年かかるので、そこからさらに学位をとるのか、専門医を極めていくのかという選択になります。村上先生はこのシステムをどう考えておられますか。

村上)確かに、研修期間は長くなりました。このような学生や研修医の問題に加えて、今の医局による勧誘について思うことがあります。現在の卒業生の勧誘は各医局単位で、少ない卒業生に対してなされています。個々の医局が最適に向かう状況が愛媛県全体の最適になるかはわかりません。愛媛県全体の最適を満たす戦略を立てることが同窓会にはできるのではないかと思います。

薬師神)難しい要望ですが、おっしゃる意味は分かります。三木先生は、県職員として要望はありますか。

三木)県医師会で、女性医師支援に関わらせていただいています。愛媛大学でも女子学生が半数になっています。復職支援や勤務条件がどんどん改善されると、女性医師が働きやすくなり、愛媛や大学病院にも残ってくれると思うんです。今は充実した取り組みを進めておられますが、この方向で続けてほしいです。

薬師神)その点では、今年度病院長になった杉山先生は、働き方改革を進めるというスローガンを掲げています。今は研修医も5時や6時に帰れて、土日当直に任せるといったシステムです。ただ、それで医師は育つのだろうかと言った意見もあります。

土居)個人によるでしょうね。もちろん今でも、緊急手術などでは休日や夜間でも呼び出されていることは多いと思います。県立中央病院で研修中の私の娘も緊急手術で時々呼び出されているようです。私たちの頃と違うのは、手当てが十分につくようになったことです。私たちの頃は研修医の給料だけでは食べていけない状態でしたが、今は当直手当や時間外手当など研修医にも十分、手当が支払われていると思います。



薬師神)石丸先生もお子さんが医師になったわけですが、今の学生たちに要望はありますか。

石丸)私たちの時代とは全く違うんだらうと思います。勉強ばかりではなく、視野を広く持ってほしいですね。趣味でも好きなことでも、医学以外のことをしてほしいです。そうすると、疲れたときや嫌になったときにも気分転換ができ、もうひと頑張りやろうと思えます。息子の「釣り」のように、それがないと生きていけないものが1つあってもいいと思います。

薬師神)村上先生は、医学部に対して要望がありますか。

村上)今の学生さんは勉強することがとても多いので大変です。石丸先生もおっしゃったように、時間がある間は楽しいこともつらいこともいろいろと経験してもらったらと思います。

(6) 大学や同窓会への要望

薬師神)そろそろまとめに入ります。2年後に医学部は50周年を迎えます。50年の節目に、大学や同窓会へ要望はありますか。

土居)私は、愛媛大学医学部は進展してきたと思っています。私が県立中央病院で研修していたとき、愛媛大学出身者は正職員にはほとんどおらず、研修医もごくわずかでした。外科には、九州大学の第一外科からきた研修医が同期でいましたが、彼が言うには、九州大学の第一外科が持っている関連病院の中で手術件数が最も多いのがこの愛媛県立中央病院だということでした。だから、絶対に九大の第一外科は愛媛県立中央病院を手放さないだらうということでした。しかし今や県立中央病院にも愛媛大学の出身者が多くなり、県内の他の病院にもどんどん医師を派遣するようになってきました。愛媛大学医学部附属病院は大きく発展してきて、その影響力は浸透していると思います。愛媛県立中央病院はもちろん、他の病院でも、愛媛大学出身者が重要なポジションを占める割合が増えてきました。私はまだまだできると思います。大学や愛媛の医療の発展はもちろん、医師たちが安心して就職できることを確保する意味でも愛媛大学の出身者が増えるのは大事だと思います。

石丸)私はいろんな事情で愛媛を離れた先生方が、再度愛媛・松山に帰りたいたいに気安く相談したり、あっせんする役割が同窓会にあったらいいと思うんです。私自身が個人的に相談を受けてきたので、そういうことを同窓会が担ってくれたらと思います。また、夫も言っていることですが、愛媛にいて、愛大出身だと、聞きたいことがあったり患者さんを紹介するときに同級生や同門の先生がたくさんいるので、とても助かります。これが一番のメリットで、残ってよかった、ありがたいと思うことですね。

三木)私も行政で仕事をしているので愛媛に残ってよかったと思っています。知り合いがいて、ネットワークがいっぱいある環境で仕事をさせていただくのはありがたいですし、同窓会にも感謝しています。要望があるとすれば、先ほども言いましたが、女性医師が働きやすく、なおかつ一度離れたとしてもまた復職できる、温かく迎えてもらえるような仕組みを作っていただきたいと思っています。

村上)県内に医師に残ってもらうには、県外の医師にも目を向けたらいいのではと思っています。以前、高校の同級生から「子どもが愛媛大学に入ったのでよろしく頼む」と言われた経験があります。他県に行った卒業生でも、子どもさんが愛媛大学に入学する可能性もあるので、他県へ行かれた先生や県外からの学生さんの親御さんとも積極的に情報交換を続けていただきたいです。それが長期的に、愛媛県に医師が残るためには必要な戦略の一つかと思います。

八杉)私は愛媛大学に残りつつ同窓会にも入っているので、卒業生にしっかり残ってもらうということで、残りの医師人生をそこにさげたいですね。同窓会も会員が増えて活発になってきています。相談があるときにはまず同窓会にさせていただけるように、会長に相談するのは難しくても、もっと気軽な相談窓口があるということもどんどん発信していきたいですね。また、一番はやっぱり同窓会の会員になってもらうことですね。7割くらいだと聞いているので、100%を目指します。

土居)最後に景観的なことなんですが、大学の駐車場のことです。昔は綺麗な芝生で、学生たちがくつろいでいる風景も見られたんですが、駐車場になってから殺風景になっています。立体駐車場を別に作って、芝生などを復活させてほしいですね。

薬師神)ロータリーのところですね。面会などでも使っているので、芝生などの景観面への配慮も必要かもしれません。

薬師神)今回は、4期生5名の同窓生に、学生時代のお話からこれからの大学や同窓会、愛媛の医療について話していただきました。本日は、どうもありがとうございました。





愛大医学部出身の参議院議員として ～医療現場と医療政策をつなぐ橋渡しに～

熊野 正士 (平成2年卒・12期生)

(参議院議員 農林水産大臣政務官)

平成2年卒、12期の熊野正士と申します。大学卒業後、放射線科に入局致しました。大学で研修した後、市立宇和島病院や国立愛媛病院、松山日赤、愛媛大学病院に勤務し、人事交流で大阪大学や近畿大学、大阪医科大学でもお世話になりました。

平成28年に縁あって参議院選挙の全国比例区に公明党から立候補し、初当選させて頂きました。その際には同門会をはじめ、愛媛大学医学部同窓会の先生方にも絶大な応援を賜り、謹んで御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

日本は少子高齢化・人口減少の中、医療の分野では、ここ数年①地域医療構想、②医師の働き方改革、③医師の偏在是正、の3点に論点を整理し、議論してきました。地域医療構想は人口減少の中で医療資源を効率よく活用し、機能的分化を進めることを目的としています。医師の働き方改革では、他産業と同様に長時間労働を是正し、医師の健康を確保と医療の質と安全性の向上を目指しています。医師の偏在是正については、地方偏在と診療科偏在を是正するために、厚労省が専門医機構のシステムを活用して都市部から地方部に医師が流れるような動きを作ろうとしています。この3つの論点をもとに、課題解決のための取組を進めている時に発生したのが新型コロナウイルス感染症です。2020年1月からはじまったコロナ感染症というパンデミックとの戦いが喫緊の最重要課題となりました。新型コロナウイルス感染症との戦いにおいては、多くの医療機関、そして医療従事者の皆様の献身的なご奮闘頂いていることに対し、心より御礼を申し上げます。コロナ感染症との戦いは今なお続いていますが、当面はワクチン接種を着実に進めながら、戦時に対応できる医療提供体制の整備をしていく必要があります。抗体カクテル療法など重症化予防の点滴治療も広く実施され、年内には錠剤の治療薬も実用化されようとしています。今回のコロナ感染症対策の教訓を踏まえ、今後の感染症対策の在り方を議論し、感染症に強い国を目指さなければなりません。そして、従来からの課題にも果敢に挑戦し、世界に誇るべき日本の医療体制を維持・強化するためにも、上記3点の日本の医療課題について、将来を見据えて取り組む必要があります。

私が政治の世界に飛び込んで実感していることは、日本の医療をよりよいものにしていくには、医学教育や医師としての日々の努力あるいは医療機関としての役割など、知識や技術など医療を支える前提を強化していくことが重要ですが、その上で、やはり制度として持続可能なものに作りあげていかなければならないということです。そのためには、様々な知見を集約し、現場の声を反映させていくことが極めて重要であると考えています。私が政治活動する上で Motto としていることは、とにかく現場の意見をよく聞いていくということです。日夜、医療現場でご奮闘されている先生方だからこそその課題もたくさんあると思いますし、逆にそこには知恵が存在しています。

医師の国会議員は衆参で約20名おりますが、愛媛大学医学部出身は私だけであり、また全国国会議員710人中、愛媛大学出身の国会議員は私ひとりであります。愛媛大学医学部の同窓生の1人として、皆様方のお声を国の施策に反映できれば、これ以上自分にとって嬉しいことはありません。是非とも様々なご意見を賜れば幸いです。今後ともご指導頂きますようお願い申し上げます。

恩師をおたずねします



思いつく儘に、愛媛大学医学部創設の頃

四宮 孝昭 (特別会員)

(愛媛大学大学院医学系研究科名誉教授<前 法医学教授>)

月日は定かでは無いが、忘れ得ぬ思い出を綴ってみよう。

昭和48年頃、愛大医学部の教授に内定された者は、京都大学医学部の南に面した飲食店に集合した。建物の設計を変更する目的である。各講座の建物を個別に建築する計画を変更しようとする案である。柿本泰男先生の提案で、9階建の鉄骨造りとしコンパクトにまとめて建てる事が、文部省から叱られながらも何とかその日のうちに決まった。

その後、片岡喜由先生が勤務している木造平屋の天井が高い生理学教室を訪れた。次に、田部井亮先生が勤める病理学教室を訪れた。部屋には最も高額のココン顕微鏡が設置されていた。壁には、森京大教授の肖像画が掛かっていた。森教授は徳島県出身である。此の好で同郷の伊原宇三郎画伯が油絵として画いたらしい。芝が京都大学の慣習であるとすれば素晴らしい伝統であろう。

翌日は、愛大医学部の造成地を初めて訪れた。ブルドーザーのみが動いている中、南方に乳房の形をした山が見える。松岡健三先生が「あの山に於て、スキーが出来ますか?」と私に尋ねたのには驚いた。

夜になって、松山市道後樋又にある愛媛大学学長室を訪れた。芦田譲治先生は、大きな薬缶に日本酒を一杯入れて、私達に飲酒を勧めた。それから、隣の女性職員に「われはうみの子」をピアノで弾いて下さい。」と依頼した。女性職員は、われは海の子を演奏した。然し、芦田先生は「われは湖の子」を依頼したのである。正式には、琵琶湖周航の歌、元は、第三高等学校、水上部の歌であった。現代子には此の歌を知らぬらしい。然し、私達老いた者は、今も旧制高校を懐かしんでいる。

医学部校舎が建築される迄は、私達は松山市堀之内にある1日愛媛県立衛生研究所の建物に於て、仕事を行っていた。当時は、動物が余った為か、恐らく道後動物園から貰った猿約10数頭を檻に入れて敷地上に並べて置いていた。之等の猿が如何に使用されたかは、今も知らない。

松山市の溝辺町には、教官の住宅として木造30戸が建築され、私達も共に住んだ。時折、西洋風を揚げて遊んでは、遠くから聞こえる石手寺の鐘の音に、故郷を思い出したりした。秋には、重信川の河川敷に於て、芋炊きを開催した。教官は勿論、職員も参加した。須田正己先生は、愛媛大医学部創設歌を作詞した。そして、須田先生の母校第五高等学校寮歌「武夫原頭草萌えて」の曲で先生作詞のその歌をマイクで歌った。録音をしてはいない。未だこの作曲は無い。将来、何かの記念式典に作曲して後世に伝えたい。

昭和50年頃、医学祭が始まった。三島神社の跡地を中心として樽御輿を担いで構内を練り歩いた。神職の資格を持つ榎田典治先生(2期生・昭和55年卒)が御輿を先導した。医学祭には、福利会館に於て、麻雀大会も行われた。徹夜で行われるらしい。一部の教授からは、疲れるからとの理由で中止の案も出たが、長時間の手術の際には、2倍の体力が必要との当意即妙の説明で麻雀は行われた。

教養課程の始とは、松山市の文京町に於て行われた。特異なのは、英語は勿論、ドイツ語、フランス語も学び得る事である。此のフランス語の力で畠山隆雄、林田直樹、吉田謙一の三先生(何れも1期生・昭和54年卒)は、法医学教授室に於て、フランス語の「ミクロ病理学」一冊を翻訳し終えた。一年半の勉強で読み終える実力は素晴らしい。学生の中には、趣味を通り越して一流の詩を作る力を持った者が生まれた。

一人は、吉田謙一先生である。彼は「母の文いづも速達雁渡る」で朝日俳壇の年間賞を受けた。もう一人は、久山倫代先生(9期生・昭和62年卒)である。彼女は「弱さ悲しさ受けとめ得るや白衣着て医師の姿せる学生われは」で朝日歌壇の年間賞を受けた。二句共、医学部在籍中の作品である。

要するに、愛媛大学医学部の良い処は、教職員と学生とが一体となり勉強に勤しむ事である。そして、吉田謙一先生が、東大教授に昇進した如く、人格の陶冶を達成する事であろう。



恩師をおたずねします

日和田 邦男 (特別会員)

(愛媛大学大学院医学系研究科名誉教授
<前 循環器・呼吸器・腎高血圧内科学教授>)

このタイトルは編集部から戴いたものです。私の恩師は3人でして、皆さんは天国にお住みになっています。私はもたもたと齢を重ねていますが、果たして天国へ行けるか否かわかりません。私の恩師は愛媛大学医学部第二内科初代教授の國府達郎先生、大阪大学医学部第三内科教授(当時)山村雄一先生と留学先のスイスバーゼルにあるFriedrich Miescher研究所部長のE.D.Wachsmuth先生です。

山村先生は私の最初の医学研究を指導し、研究とはこのように進めるものであるという事をお教え下さいました。留学先のWachsmuth先生は当時の世界一流の生化学の技術を余すところなく教えて下さいました。しかし私の直接の指導者は國府先生です。先生は1974年4月に愛媛大学医学部教授に就任されました。

私は大学院生として大阪大学第三内科の高血圧研究グループに所属し、レニン・アンジオテンシン系の研究を始めました。山村先生が新しく高血圧研究グループを作られその長に國府先生を指名されましたので、國府先生は動脈硬化の病理組織学的研究から高血圧の生化学的研究に華麗に変身されつつある時に私は先生の下で研究を始めました。先生にとっては私が指導を受ける最初の大学院生でしたので、厳しく指導を受けました。月曜日から土曜日(当時ははんどん)までは毎日夜9時から10時頃まで、日曜日朝9時頃から夕方まで先生の実験を手伝っていました。その上最初の2年間のグループ内は國府先生と私と二人だけでした。しかし、あっという間に先生はわが国の高血圧研究の指導者の一人として華々しくデビューされていきました。

國府先生の大きな体と迫力ある発言は愛媛大学医学部の一期生以下先生在任中の学生には強い影響を与えました。強い影響を受けた一期生以下の人も既に60代後半から50代に達し、愛媛県下はもとより全国的に大いに活躍されていますことは大変喜ばしいことです。

思いがけない新型コロナウイルスのパンデミックに遭遇し日本中の医師はとまどざるを得ませんでした。第一は感染症の予防に大きな効果を有するワクチンが国内では生産されていないことでした。この理由は国民の間にワクチンは怖いといういわゆるワクチンギャップがあったため1990年代以降研究開発が行われず、外国からワクチンを購入せざるを得ませんでした。第二はパンデミック時の危機管理体制が出来ていなかったために自宅療養者を含む医療難民が溢れている現実です(2021年8月末現在)。現実を直視し同窓会全員がそれぞれの分野で全力を尽くすではありませんか。愛媛大学医学部同窓会の益々の発展を期待しています。



國府達郎教授と共に



医学部完成を祝す！ 医学部・講座創りに“付け足しの助手”から参加して

恩地 森一 (特別会員)

(愛媛大学大学院医学系研究科名誉教授
＜前 消化器・内分泌・代謝内科学教授＞)

「医学部の完成には50年以上必要」は、伝統の異なる5つの大学を体験した私の結論です。創立50周年を迎える愛媛大学医学部では、学内の診療、教育と研究体制は完成し、卒後・専門医研修や将来の就職先となる臨床研究の可能な関連病院の整備も進みました。第三内科では、開講当初から人材と関連病院の確保を念頭に、良医の上に診療、教育と研究ができる人材育成を講座創りの支柱としました。

私は29歳で最も若い助手となり、学位のないため“付け足しの助手”として講座創りに参加した。骨組みは出来るも未完成の講座創りの中で恩師が早逝され、私は1994年(46歳)に教授となった。光学医療診療部の創立や、地域医療学や地域内分泌学の講座創りにも努めた。専門医制度が発足する時期で内科、消化器病、内視鏡、超音波、糖尿病、内分泌、総合診療科等10以上の専門医教育に早くから力を入れ、専門医教育に必須の関連病院を整備した。年平均8名以上の入局者があり、私が退職した2013年春には黄蘭会(第三内科同門会)の会員は300名近くになった。樹状細胞の研究を早くから手掛け、ウイルス性・自己免疫性肝疾患、消化器癌、炎症性腸疾患や肥満等の免疫病態の解析や治療ワクチン開発を行った。学会理事として、肝臓学会や病態栄養学会等の全国学会の主催や、「肥満と消化器疾患」研究会(消化器病)やがん病態栄養専門管理栄養士制度(病態栄養)の発足を担当した。難治性肝胆道疾患の厚労省班会議に長年参加した。卒後教育に熱心な講座とされ、初代の総合臨床研修センター長に指名された私は、直ちに2代目に最適任者の高田清式先生を推挙した。その結果、愛媛県は全国でも有数の研修医数の獲得と初期・専門医研修のできる関連病院が整備され、さらに縁の深い熊木天児先生が3代目を継がれたことは嬉しい限りで、私は**卒後教育の面から医学部完成に寄与できた**と自負しています。

学位論文を指導した一期生の金岡久万高原町立病院長の急逝を契機に町長さんのご推挙で2018年に父母の眠る故郷に帰り、故里での診療と松山市の高齢者施設での仕事は医師人生の最期の勤めです。地域医療学講座の学生実習も楽しんでいます。愛媛県下には多くの同窓生が立派な専門医として活躍されており、患者さんの良医への紹介は得意です。紹介させていただいた時にはよろしく願います。非日常的なこととして、国の某省の委員会では最先端の研究に血が騒ぎ、元気を貰っています。末筆ながら、医学部と卒業生の益々のご発展を祈念します。



実習学生とともに



医学部最初の忘年会

小室 輝昌 (特別会員)

(早稲田大学名誉教授
＜前 生体構造医学(旧解剖学第二)准教授＞)

愛大医学部の校風として、教官学生間の垣根の低さを挙げ、一体感をもって過ごす事が出来たと懐かしむ卒業生がいる。同時期に新設された医学部、医科大学には聞かないそうだから、愛大医学部に特徴的な創設期の先生方の薫陶の賜物と見做してよいだろう。

新しい医学部の風土作りを目指し、学生達との触れ合いに意を尽くした筆頭に二解剖の上原教授がおられた。研究教育の本分に昼夜の別なく注力したのは勿論だが、余暇の遊び事、飲み事にも我々は協調して大いに楽しんだ。一昔前のパンカラ気風、豪傑肌を標榜し、稚気に富み、羽目を外す行動は、今ではネット上に投稿され、大炎上、職を失って鎮火するといった恐れもあったと自認している。が、同時に危険水域すれすれを共有する経験が互いの心を開く鍵にもなったのではないかと、とも思っている。ネットによる監視社会の相を呈する現今では、起こりえない軌跡、奇跡だったのだろうか、しばしば良薬に副作用はつきもので、ワクチンの有用性は副反応を凌いで大きい、と今も強調されている。

さて、愛媛大学医学部は1973年9月に正式に認可創設されたが、その年の暮れの学部忘年会が個人の自宅で行われたことを信じる人がいるだろうか。その忘年会は溝辺にあった官舎の一隅、小室の自宅で行われた。創設時の人事は学年進行に沿って発令されるため、第一陣は数講座のみだったのに加え、発令後も諸々の事情で赴任しない人もあり、須田学部長、事務長をはじめ、教官、技官、事務方、研究補助の人達を含めても、参集した人の数は、八畳と六畳の間の襖を外した14畳で間に合う人数だった。当時、独身だった小室の自宅には家具らしきものはなく、広く使えるというのが選定の理由であり、会場のしつらえ準備は若手全員が当たり、料理等は上原教授夫人を中心に溝辺官舎に入居されていた奥様方の協力を得たのである。

少人数ゆえに触れ合う機会も多く、和気藹々の雰囲気が醸し出される中でも、新しいモノを造り出すという熱意を秘めた人々が、目標に向かって全力で邁進した時代の皆の姿は、今も印象に残っている。

新天地での活躍を心に期し居を構えた溝辺の休日には、初めて見るみかんの花の香り、石手川のハヤの魚影に心を潤し、よく耳にしたことのある童謡の世界に身を遊ばせる想いがあった。東京育ちの自分にとっても郷愁をよぶ風景で、澄んだ水に足を浸し毛針釣りに興じたのは忘れ難い思い出である。

そして、30年前に松山を離れ早稲田大学で研究を継続して来たが、70歳の定年退職後は隠居生活を楽しんでいる。当時の同僚、学生諸君とは今も交流があり、愛媛時代の貴重な財産となっている。元気だけが取り柄と自負した身体も寄る年波には勝てず、医療の先端で活躍している卒業生の助けを借りることが多く、昔の恩恵と感謝している。



第2解剖学上原教授夫人と
軽井沢にて2019年

第37回愛媛大学医学部同窓会総会を開催しました

2021年8月7日16時より、松山市伊予鉄会館クリスタルホールにて、第37回愛媛大学医学部同窓会総会を開催しました。

当日は定例総会(審議事項下記)

- # 1. 2020年度会計決算報告と2021年度予算の承認
- # 2. 同窓会一年間の活動報告
- # 3. 今後の同窓会総会のあり方
- # 4. 創立50周年記念(2023年)方向性の検討
- # 5. その他審議事項

に引き続き、特別講演(下記# 1、# 2、# 3)を開催。

- # 1. 熊木 天児先生(愛媛大学医学部17期生)
愛媛大学総合臨床研修センター長・教授
演題 「医学教育の変遷
～ past, present, future and beyond～」
- # 2. 柘植 勇人先生(愛媛大学医学部7期生)
医療法人つげ耳鼻咽喉科 理事長
演題 趣味を地域医療に生かす創作落語
「ウイルスの仲間たち」
- # 3. 四宮 博人先生(愛媛大学医学部1期生)
愛媛県立衛生環境研究所 所長
演題 「新型コロナウイルスとの闘い！」



毎年8月第1土曜日、同窓会総会を開催します。2022年8月6日(土曜日)もどうか皆様ご参加下さい。各学年(期)同窓会との同日開始もお考え下さい。

新型コロナウイルス感染症パンデミックとの闘い（同窓会へ緊急寄稿）



四宮 博人（昭和54年卒・1期生）

（愛媛県立衛生環境研究所長 愛媛大学客員教授）
（地方衛生研究所全国協議会 副会長・感染症対策部 会長）

原因不明肺炎の流行

2019年12月31日、中国湖北省武漢市で発生した原因不明の肺炎症例がWHO中国事務所に報告された。起因ウイルスのゲノム配列が同市の患者サンプルから解読され、2020年1月10日にウェブ上で公開された。新興感染症の場合、国内の検査体制は国立感染症研究所（感染研）と地方衛生研究所（地衛研）によってまず整備される。感染研と地衛研は共同して検査マニュアルを作成し、1月中に全国の地衛研でPCR検査体制が確立された。これはゲノム情報公開から2週間あまりのことであり、諸外国と比べても最も早い部類である。私は地衛研全国協議会の感染症対策部会長であることから、一刻を争う状況の中、昼夜なく携帯で感染研担当者と連絡を取り合いながら整備を進め、何とか1月中に間に合ったことを思い出す。日本では2月1日に指定感染症として「新型コロナウイルス感染症」が定められ、WHOは3月11日にパンデミック相当との認識を表明した。

PCR・PCR・PCR

平時には約40種の病原ウイルスのPCR検査のほとんどが地衛研で実施されているが、医療現場での検査ニーズの増大に応えるため、2020年3月6日から新型コロナウイルスのPCR検査が保険適用となり、医療機関や民間検査会社などでの検査体制の拡充が図られた。過熱気味のメディア報道もあり、PCR検査に対する社会的関心が高まった一方、病原体検査の実態についてほとんど知られていないことを痛感した。同年8月7日、日本記者クラブ（東京都）の依頼により、約100名のメディア関係者に対し、「新型コロナウイルスのPCR検査について」と題して講演を行い、この時の発言が、新型コロナ対応民間臨時調査会報告書において、「2月・3月以来、PCR検査という我々検査機関の中の専門用語のような言葉が、国民的な用語になるくらい、非常に関心を呼んでいる（四宮博人地方衛生研究所全国協議会副会長）」と引用された。

変異株の出現と医療の逼迫

戦後最大ともいえる感染症危機に対し、我が国は総力を挙げて対策を講じてきたが、2020年4月に「緊急事態宣言」が全都道府県に発令されて以降、いわゆる第1波から第5波の流行を繰り返し、2021年8月には4回目の同宣言が発令されるに至った。この間、第4波でのアルファ株、第5波でのデルタ株など、次々と出現した変異株への対応として、変異検出PCR検査が全国の地衛研で速やかに開始され、ウイルスの全ゲノム解析も当研究所を含む多くの地衛研で実施されている。しかしながら、流行が大きく拡大した時期にあつては医療や保健所業務の逼迫が深刻となった。愛媛県では、8月下旬に、入院患者（宿泊療養施設を含む）が218人、自宅療養者が540人に達し、行政機関、検査機関、保健所、医師会、指定医療機関、大学、薬剤・食事の配送担当など、まさに総力戦というべきオール愛媛体制でこの難局に立ち向かい、10月1日には感染警戒レベルの引き下げに成功した。日本全体としては、この時点で、累計の感染者は約170万人、死亡者は約1万7千人となり、欧米の先進諸国と比較して低い水準ではあるものの、感染終息の兆しは依然として見えない状況である。

ワクチン接種の普及と今後の展望

日本では2021年2月から、新型コロナウイルスのワクチン接種が開始され、ファイザー社およびモデルナ社のmRNAワクチンが主として使用されている。これらのワクチンはヒトで実用化された最初のmRNAワクチンであり、最先端技術によって製造され、有効率が約94%と高性能である。10月3日時点で、2回接種を完了した人の全人口に占める割合は60%を超えている。最後に、今年8月に医学部同窓会総会で講演させていただいた際に示した「今後の展望」を以下に紹介する。

- 1) 新型コロナウイルス変異株の出現とそれに対応したワクチン接種とのせめぎあいが続く（今後1年～3年？）。
- 2) この過程で、SARSコロナウイルスのように突然終息するか、風邪コロナウイルスのように季節的流行を繰り返すウイルスに変化する可能性がある。
- 3) ある程度集団免疫が成立した時点で、新型コロナ存在下での社会活動の緩和を試行し、治療薬の開発はこの過程を促進する。

同窓会員諸氏と「密」な状態で、心おきなく杯を重ねることができる日が来ることを念願しております。

支部紹介

第19回 愛媛大学医学部同窓会東日本支部会総会

2021年1月23日(土) Zoom によるオンラインで開催されました。

当番幹事は19期生の黒田勇二先生(なないろレディースクリニック院長)、会計報告は幹事長西井鉄平先生(横浜市立大学附属市民総合医療センター医療の質・安全管理部)。

特別講演座長は当番幹事の黒田勇二先生の軽妙な司会で進み、

第一題は浜松医科大学形成外科教授に就任された中川雅裕先生で、顕微鏡下血管吻合による皮弁術の卓越した技術と多くの趣味を人柄溢れるトークでお話されました。

第二題は黒田勇二先生で、なないろレディースクリニックの経営の基盤、妥協しない美しい病院建築と備品アート、そして、毎年1000例を超える産科経営術。また、その関連医療を展開する経営術は圧巻でした。

第三題は愛媛大学総合健康センター教授に就任された古川慎哉先生で、糖尿病のDOGO Studyを世界発信され、EDのスペシャリストとして楽しいお話を頂きました。

コロナ流行禍にも負けずに、25名の同窓生が参加され、全ての参加者から一言近況報告も頂きました。愛媛大学医学部卒の先生方が、色々な形の医療展開で、地域医療や世界医療に貢献をされているお話をうかがえるのはとても貴重で、楽しい時間でした。

2021年がどのような年になるのか、2022年の本総会がどのような形で開催できるのかは未定ですが、私達の能力や想定を越える事態に遭遇しても、覚悟を決めて歩める愛媛大学医学部同窓の仲間達がいるだけで、ありがたいと思います。ご参加いただいた皆さん、本当にありがとうございました。

(文責 酒向 正春 9期)

(大泉学園複合施設/ねりま体育会病院長・ライフサポートねりま管理者)



医学部課外活動(運動部)紹介

愛媛大学医学部 卓球部

代表 益本 凌汰(医学科3年)

こんにちは。愛媛大学医学部卓球部です。

私たちは男子17人・女子17人の総勢34人で、火曜日・木曜日・土曜日に重信キャンパス体育館にて活動しています。2016年のリオオリンピックで卓球という競技が注目を集めたことが関係しているのかは分かりませんが、大学から卓球を始めてみようという学生が増えたように感じます。運動部としてはかなり珍しいと思いますが、練習は任意参加の形を取っています。ですので、他の部活と兼部している部員も多いです。



参加している大会は、四国岡山定期戦、中四国医歯薬学生卓球大会、西日本医科学生総合体育大会、西日本医歯薬学生卓球大会です。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響により、昨年度に引き続き今年度も主だった大会は全て中止となりました。大会が中止となってしまったことは非常に残念ですが、今後いつ大会が開催されても良いように日頃の練習から目的意識を持って取り組んでいきたいと思っています。

また、卓球部は部員同士の仲もよく、かなり自由な部活です。各々が楽しみつつも、競技技術の向上に必要な課題と向き合いながら練習に取り組んでいます。こうして私たちが安全かつ楽しく活動できるのは、顧問の檜垣先生をはじめとするOB・OGの先生方のご支援があってのことであり、部員一同大変感謝しております。これからも支援して下さるOB・OGの皆様の期待に応えられるよう頑張ってお参りたいと思います。

医学部課外活動(運動部)紹介

愛媛大学医学部 バドミントン部

代表 竹内 裕盛(医学科3年)

こんにちは。愛媛大学医学部バドミントン部の紹介をさせていただきます。バドミントン部は、現役生39人、引退生24人と人数がとても多く、にぎやかな部活です。主に医学部の体育館や外部の体育館(ゆとり公園など)で活動しており、以前は月・水・土の週3回の練習でしたが、現在はコロナの影響により、グループを二つに分けて、週2回の練習となっています。現役生のうち、男子15人、女子24人、また約7割の人がバドミントン未経験者です。練習としては、もちろん基礎的な素振りやフットワークを練習しながら、リレー形式でトレーニングを行ったり、ゲーム形式の練習を行ったりと、メニューを工夫しながら楽しく活動に取り組んでいます。

参加している大会には、5月の四国大会、8月の西医体・西コメ、3月の中四国大会などがあります。今年は昨年と同様に諸々の大会が中止となり、非常に残念ですが、来年は開催されることを願って一人ひとりが目標を持ちながら練習に励んでいきたいと思えます。

最後になりますが、バドミントン部がこのような練習に取り組んでいるのは、OB・OGの先生方のおかげです。大変感謝しております。これまで先輩方から教わったことを生かし、期待に応えられるよう活動を行っていたいと考えております。今後ともご理解とご協力をお願いいたします。



愛媛大学医学部 バレーボール部(男子)

代表 福岡 智輝(医学科3年)

こんにちは。愛媛大学医学部男子バレーボール部です。男子バレーボール部は現在、月、水、土の週3回、学校の体育館で活動しています。数年前まで部員が少ない時期が続いていましたが今ではプレイヤー16人、マネージャー12人の大所帯となり仲良く活動しています。プレイヤーは初心者の方の人数が多く、練習中では先輩が後輩に基礎を教えてあげるといった和やかなムードが漂っています。



さて、世界中で新型コロナウイルスにより日常生活の制限を受けていますが、男子バレーボール部も例外ではありません。この約1年半の間、部活動が禁止されていた期間も多くあり、十分な練習ができませんでした。また西医体や医歯薬大会、中四国大会など主だった大会の中止が続き、モチベーションを保つのも大変でした。そんな中、今年7月に四国リーグの開催が決まり、参加校が少なく本来の規模の大会とはいきませんでした。1年半ぶりに公式大会で1勝することができました。今年1年間も大会の開催についてまだ不透明ではありますが、この1勝を糧に感染対策を徹底した上で練習に励みたいと思えます。

また、現在は自粛中ですが男子バレーボール部はとにかく仲が良く、部活動以外の時間でも学年の垣根を超えて遊びに行くことも多いです。しかし、今年は部活動がなかった期間が多かったために、入部してくれた1年生と交流する機会もまだ少なくお互いに知り合っていない状態です。早く1年生に部の一員として馴染んでもらうためにも部活動の再開を願うばかりです。

今年度の目標としては下級生の経験値を増やしてあげることが第一に掲げています。特に2回生は全員が初心者をはじめで、練習試合や大会での試合の経験がまだありません。ですので大会が開催された際には積極的に起用してコロナ禍での遅れを少しでも取り戻せるようにしていこうと考えています。

最後になりますが、こうして部活動が無事行えるのもOB、OGの方々のご支援があってこそだと思っております。我々も先輩方の功績に恥じぬように努力を続けていくとともに、より良い部活動の実現に向けて新しい文化を作り上げていこうと思っておりますので引き続き応援よろしく申し上げます。

愛媛の医師をまじめに募集中!

愛媛プラチナ えまじめ

ドクターバンク事業のご案内

愛媛県・愛媛県医師会・愛媛大学医学部連携事業

専門医として積み上げてこられた多くの
経験・知識・技術を、愛媛県で
活かしていただませんか。



愛媛県イメージアップ
キャラクター みきゃん

Web から簡単に
登録できるけん!!

医師無料職業紹介

<https://www.ehime-doctorbank.jp/>



愛媛県
タークみきゃん



きめ細かく誠意をもって
お手伝いさせていただきます

秘密を固く守ります

手数料はかかりません

打ち合わせにお伺い
いたします

あなたのご希望を
最優先いたします

お問い合わせ先は
こちら

一般社団法人 愛媛県医師会 愛媛プラチナドクターバンク事務局

〒790-8585 愛媛県松山市三番町4丁目5-3
電話：089-943-7582 FAX：089-933-1465
E-mail p-dr@ehime.med.or.jp 担当 (中田)

愛媛県保健福祉部社会福祉医療局医療対策課

〒790-8570 愛媛県松山市一番町4丁目4-2
電話：089-912-2449 FAX：089-921-8004



愛媛県
こみきゃん

国立大学法人愛媛大学医学部創立50周年記念ご寄附のお願い

謹啓、同窓会の皆様方にはますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

愛媛大学医学部は、設置が昭和48年(1973年)。11月に第一回医学部入学式及び開学式が行われて以降、令和5年(2024年)に医学部創立50周年を迎えるところとなりました。既に卒業生は5,000人を越え、後に開設された看護学科を合わせると6,000人を超える卒業生を世に送り出して参りました。この50周年の節目に、令和5年の秋、医学部創立50周年を記念した事業、式典、講演会、及び祝賀会を盛大に挙げる運びとなりました。今回の同窓会誌にもその寄附趣意書を同封させて頂いております。

今回の寄附を通じ、同窓会としましては50周年の節目にふさわしい「後世に残る50周年記念建造物の築造」事業を考えております。

今回医学部がおこなう募金の目標額は1億円。5,000人の同窓生が2万円のご寄附を頂けますと可能です。しかしながら、住所が特定出来ない先生方、残念ながら賛同を頂けない先生方もいらっしゃいます。本事業になにとぞ御賛同いただき、お一人5万円以上のご寄附を頂ければ幸甚に存じます。皆様の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

謹言

令和3年11月吉日

愛媛大学医学部同窓会長 薬師神 芳 洋
副会長 羽 藤 直 人
副会長 武 田 定 典

あ と が き



村上 信五 (昭和55年卒・2期生)

(愛媛大学医学部同窓会東海・中部支部 支部長)
(名古屋市立大学特任教授 学長補佐)

何度となく押し寄せる新型コロナウイルス感染症の波、会員の皆様におかれましては感染対策に翻弄されておられるのではないのでしょうか。8月の同窓会総会も、この2年間、現地伊予鉄会館とwebによるハイブリッド開催になっています。ただ、そのような状況においても同窓会総会の企画は着実に実行され、会報も2019年の第35号からA4版カラーに刷新されています。これも一重に薬師神会長はじめ同窓会役員のご尽力の賜物と嬉しく思っています。また、羽藤直人先生(11期生)と新たに武田定典先生(5期生)が副会長に就任され、新執行部のもつて2年後に迎える医学部創設50周年記念式典や記念事業の企画が進んでいると伺っています。

さて、会報37号ですが本年も新任教授から力強い就任のメッセージ、また、医学部の発展に長年ご尽力いただいた教授から心に響く退任の言葉をいただきました。毎年繰り返す新旧交代劇に愛媛大学医学部の健全な代謝を感じています。そして、昨年から企画された「恩師をおたずねします」は、2期生の私ですら知らなかった愛媛大学医学部の夜明け前、黎明期の様子が紹介され懐かしく拝読しました。また、3年前から連載している「卒業生からのメッセージ」、今回は4期生の座談会ですが母校愛と働き方の多様性、地域医療への熱意を感じました。「卒業生からのメッセージ」は10年毎にまとめていただくと世情や卒業生の意識の変遷が掴めるのではないのでしょうか。

さて、ご存知ない方も多いかと思いますが、愛媛大学医学部は1973年(昭和48年)に山形大学医学部、旭川医科大学と一緒に新設医大として開設されました。これは田中角栄の第2次内閣で閣議決定された経済社会基本計画のひとつである「一県一医大構想」に基づくもので、1979年の琉球大学医学部設置を最後に15の県に新設医大が設立されました。これにより「無医大県」がなくなり、私学の医学部増設も合わせると全国の医学部生定員が約2,000人増加し8,000人を越えました。私が学生の頃、20年以内に医師過剰時代に突入し、しっかり勉強しておかないと将来職を失うと良く言われたものでした。あれから40年、医師過剰どころか未だに地域では医師不足が続いており、幸か不幸か予測は外れました。

この田中角栄氏の「一県一医大構想」を、もう少し深掘すると1972年6月11日発表された「日本列島改造論」に遡ります。明治からの東京一極集中を変えるために、新幹線や高速道路、通信網を整えて都市と地方を結び、地方に工業を再配置して過疎を解消するというものでしたが、国土開発に繋がった半面、地価が上昇し、交通の便が良くなったことで人の流れが地方から都市部へと予想に反する結果を招きました。では、「一県一医大構想」はどうか。成功！少なくとも我々が医師になれたのは本構想のお陰で角栄さまさまである。その恩返しというわけではないが、愛媛大学医学は全国に優秀な人材を多数輩出し、4,295名の卒業生のうち1,796名が愛媛県内で医師として医療や研究、福祉、教育に幅広く携わっています。また、平成6年に設置された看護学科も優秀な卒業生を多数輩出し、県内の看護医療・福祉を支えています。皆さんは日経グローバル「大学の地域貢献度に関する全国調査」をご存知でしょうか。素晴らしいことに2021年度調査で愛媛大学は全国第5位にランキングされました。地域貢献は医学部だけではなく、医学部の貢献は大きいと思います。

また、4,000人を超える卒業生は全国各地で活躍し、中には海外で研究する医師、未開の地で医療活動する医師、大使館や領事館に勤務する医師など多種多様な医師の活動が紹介されました。そして、平成28年、卒業生から初めての国会議員が誕生しました。12期生の熊野正士先生で参議院の全国比例区から立候補して当選されました。今回寄稿いただきましたが同窓生のひとりとして大変誇りに思います。現在の医師免許を持った国会議員は約20名とのことですが、新型コロナウイルス感染症対策はじめ、危急の課題である地域医療構想や働き方改革、医師偏在など、現場を良く知り理解している医師が政策に関わることが大切です。中国の古典に「小医は病を医す、中医は人を医す、大医は国を医す」という言葉があります。熊野正士先生には愛媛大学の卒業生を代表し、医療・福祉を通して国を医す、大医になっていただきたいと思います。

最後に2年後の医学部創設50周年記念式典、各支部会も力を合わせて盛り上げましょう！

《会員の個人情報に関する取り扱い》

愛媛大学医学部同窓会は、会員の個人情報の保護と適正な取扱いに取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1. 個人情報の使用目的

同窓会が取得した個人情報は、以下の目的に使用されます。

- ・同窓会名簿の作成
- ・定期的刊行物(会報、名簿)の送付
- ・同窓会会費徴収のための業務
- ・事務連絡及び各種文書の送付
- ・支部会の行事開催に関する事務連絡及び各種文書の送付

2. 個人情報の提供

会員から情報の紹介依頼があった場合、折り返し対応させていただきます。また、第三者からの電話照会等での返答は致しかねますので、ご了承下さい。

3. 個人情報の管理

「会員名簿」は、施錠保管しており、「データベース」は、インターネットに接続していない専用PCで独立した作業を行っております。

《次号会報原稿募集》

★同期会報告

幹事の方は、氏名、卒業年、開催予定日を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 正会員20名以上の参加
 2. 報告文、集合写真を提出(会報原稿)
 3. 会費未納者への納入勧誘
 4. 2年に1回

★学生海外研修留学報告・医学祭報告(学生会員)

学年、氏名を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 報告文、写真を提出(会報原稿)

《会費納入のお願い》

同窓会活動は、会員の皆様の会費で支えられております。会費納入をお忘れの方は、お早めに同封の用紙にてお振り込み下さい。

郵便振替NO. 01620-0-6644
ゆうちょ銀行169店 当座預金6644
加入者名 愛媛大学医学部同窓会
入会金を含む終身会費5万円

《会員名簿の不正使用禁止》

会員名簿は、会則により会費納入者のみ、一会員一冊の配布となります。

第三者に渡り不正に使用されますと、会員に多大な迷惑がかかります。他人に譲渡しないよう、また破棄する場合も特段のご配慮をお願い致します。事務局としても最大の注意を払っておりますが、皆様のご協力をあわせてお願い致します。なお、会員名簿の再送付は致しかねますのでご了承下さい。

注)卒業生と偽り、名簿の請求や他の会員の住所照会の問い合わせ電話があります。原則として電話での問い合わせには、即答致しかねますので何卒ご了承下さい。また、不審な業者から会員の方へ直接問い合わせがある場合も十分ご注意くださいようお願い致します。

《お願い》

会員の皆様のご寄稿、ご意見及びご感想などは是非お寄せ下さい。また、会報で取り上げてみたいテーマ、企画等アイデアがございましたらご一報下さい。お待ちしております。

お知らせ

第38回

愛媛大学医学部同窓会通常総会

次回通常総会の開催予定をお知らせします。日程が8月第1土曜日に変更となりました。特別講演会も予定しております。詳細につきましては、HPに掲載予定です。万障お繰り合わせの上、ふるってご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時：2022年8月6日(土) 16時～
場所：松山市内を計画中(Web視聴可能)
議題：事業報告及び会計報告、予算の承認、その他

連絡先

〒791-0295 愛媛県東温市志津川
愛媛大学医学部同窓会事務局
TEL：089-960-5989(受付 平日10時～15時)
FAX：089-960-5989
E-mail：eusmdoso@m.ehime-u.ac.jp
H P：http://www.m.ehime-u.ac.jp/dosokai/igaku/